

The Japan Society for Intercultural Studies

日本国際文化学会 ニューズレター

第9号 2006年5月31日発行

編集・発行

日本国際文化学会事務局

〒520-2194

滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5

龍谷大学瀬田学舎 松井賢一研究室

TEL/FAX 077-543-7866

<http://www.world.ryukoku.ac.jp/~wwjsicsm/>

第5回全国大会（7月15・16日）のお知らせ

本年度の全国大会が、7月15日（土）・16日（日）東北大学川内北キャンパスで開催されます。参加要項は下記の通りです。プログラムは次ページにあります。

- 参加費** 大会参加費用は2,000円、懇親会費は別途3,000円となります。なお、大学院生・学部学生はそれぞれ1,000円、2,000円です。
- 参加申し込み** 本学会のホームページからお申し込み下さい。FAX、郵送でのお申込みは、下記にお問い合わせ下さい。
- お問い合わせ** 日本国際文化学会 第5回全国大会実行委員会
東北大学大学院国際文化研究科 浅川照夫
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41
TEL・FAX 022-795-7531
e-mail asakawa@mail.taints.tohoku.ac.jp

研究会を 開きませんか？

これまで、本学会では、常任理事・幹事会の会合のあとに研究会を設定して参りましたが、第26回常任理事・幹事会におきまして、会員の研究会への参加を増やすために、会員の発案で会員の所属する機関あるいは希望する会場で日本国際文化学会研究会を開催出来るようにするとともに、開催にあたって必要な通信費、お茶代等の支出に対し、1万円を限度に学会から補助を出すことを決定しました。

研究会開催を希望する会員は、研究会開催申込書（ホームページトップの「研究会申込フォーム」の項目からお申し込み下さい。）に、日時、場所、研究テーマ、報告者、研究会責任者の名前等を記入し、研究会開催の1ヶ月前までに事務局にお申し込み下さい。事務局で受け付けられた申し込みは、速やかに常任理事・幹事による合意を得た上で、開催が決定されます。開催が決定されますと、ただちに本学会会員全員に開催案内がメールまたは葉書で送られます。

研究会終了後2週間以内に、研究会サマリー（1,000字程度）、参加者リスト、補助の対象となる支出の明細と領収書を事務局に提出して下さい。

プログラム

第1日(7月15日)

<午前9時~10時>

日本国際文化学会常任理事・幹事会

<午前10時~12時>

●自由論題セッションA

(司会：鈴木 道男・東北大学)

古家 聡 (武蔵野大学人間関係学部)

「個人主義と集団主義の多層性」

高山 陽子 (東北大学大学院環境科学研究科)

「愛国主義の確立と中国民俗学—

『中国民族史』の分析を通して」

小西 正雄 (鳴門教育大学)

「戦略的本質主義に関する覚書—「ここに属さない」と宣言しない側からのささやかな申し立て—」

鈴木 祐輔 (法政大学国際日本学研究所学術研究員)

「否定の論理と超越者」

●自由論題セッションB

(司会：高橋礼二郎・東北大学)

中原 聖乃 (中京大学教養部非常勤講師)

「新植民地主義的状况

—放射能人体実験と放射能への依存—」

上品 和馬 (早稲田大学大学院

アジア太平洋研究科博士後期課程)

「戦前期太平洋会議における鶴見祐輔の活動」

長谷川雄一 (東北福祉大学総合福祉学部教授)

クリストファー W.A. スピルマン

(九州産業大学国際文化学部教授)

「満川亀太郎関係文書に見られる

アジア主義とユダヤ禍」

萩原 稔 (同志社大学嘱託講師)

「北一輝の辛亥革命観

—『民族』をめぐる問題を中心に」

●自由論題セッションC

(司会：ディニル・プシュパラル・東北大学)

梅山 秀幸 (桃山学院大学)

「ドラマ『チャンダム』と

知恩院蔵『観世音菩薩応身図』」

安達 明考 (神戸大学国際協力研究科国際協力政策専攻)

「文化遺産の保護と問題

—バーミヤン遺跡の事例を中心に—」

油井 美春 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「現代インドにおける経済発展とコミュニティ対立—マハラシュトラ州ピワンディー市の事例から—」

朴 槿英 (宮城工業高等専門学校助手)

ディニル・プシュパラル

(東北大学国際文化研究科助教授)

「韓日古民家に現れる宗教と民族性の一考察」

●自由論題セッションD

村田 鈴子 (龍谷大学非常勤講師)

「ニューカマーの子どもたちの学習問題について
—不就学と多文化共生を考える—」

山中 大輔 (龍谷大学国際文化研究科博士後期課程)

「外国人ニューカマーの「定住化」意識に関する
—考察—日本語教室、母語教室の調査を通じて—」

スヤント (日本大学国際関係研究科博士課程後期)

「日本の昔話から見たインドネシアの異類婚姻譚
—構成的な異同と地域性—」

成 寶景 (龍谷大学国際文化研究科後期博士課程)

「食に見る文化の移転と変容の型」

●自由論題セッションE

岩野 雅子 (山口県立大学国際文化学部助教授)

「家庭における子どもの社会化に関する一考察：
アメリカにおける価値教育との比較において」

古山 温 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「アラバマ州モントゴメリー「旧」バスボイコット
運動の生成と展開—女性政治会議を中心に—」

吉岡 宏祐 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「アメリカ合衆国におけるアフーマティブ・アクション
の現代的展開—高等教育機関を中心にして—」

古河美喜子 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「ヘリックと〈黄金の中府〉」

●自由論題セッションF

(司会：大河原知樹・東北大学)

芝崎 厚士 (東京大学大学院総合文化研究科

国際社会科学専攻助手)

「国際文化現象としての国際関係研究

『ソフト・パワー』概念を中心に」

齋川 貴嗣 (早稲田大学政治学研究科博士後期課程)

「国際文化交流における国際機関と国家—国際連
盟知的協力国際委員会と日本の関係を通して—」

山口 隆子 (神戸大学総合人間科学研究科博士後期課程)

「国際観光局外人招請事業の検証—1940年東京で
の「ホームステイ」成立の一要因として—」

グリツァ・ルミニツァ

(東北大学国際文化研究科博士課程)

「日本で雇用されている外国人」

●自由論題セッションG

李 相穆 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「MPEG-7による映像コーパスの外国語教育マル
チメディアコロケーション検索システムへの応用」

木下 裕介 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「談話文脈における総称名詞の解釈に関する一考察」

蔣 千荅 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「評価のモダリティとその人称制限」

恵 婷 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「『選択・具現』の視点からみる中国語の文法的比喩」

<12時～午後1時30分>

フォーラム「国際文化専攻大学院生の就職事情」

(司会)

川平 芳夫 (東北大学大学院国際文化研究科教授)
(パネリスト)
北本 暢 (立命館アジア太平洋大学副事務局長)
内田 正博 (神戸大学国際文化学部・
総合人間科学研究科教授)

<午後1時30分～午後3時30分>

●共通論題セッション1

「次世代に残すアジアの文化と技術」

(司会)

高橋礼二郎 (東北大学大学院国際文化研究科教授)
(パネリスト)
山下 博司 (東北大学大学院国際文化研究科教授)
松本 年史 (東北芸術工科大学教授)
深澤百合子 (東北大学大学院国際文化研究科教授)

●共通論題セッション2

「グローバルシティズンシップと文化の諸問題」

(司会)

富川 尚 (敬和学園大学助教授)
(コメンテーター)
伊藤 豊 (山形大学助教授)
竹島 博之 (福岡教育大学助教授)
長谷川一年 (同志社大学講師)

●共通論題セッション3

「『文化』は平等か？」

(司会)

寺田 元一 (名古屋市立大学人間文化研究科教授)
(パネリスト)
稲賀 繁美 (国際日本文化センター教授)
馬淵 仁 (大阪女学院大学国際・英語学部教授)
清水 耕介 (龍谷大学国際文化学部助教授)
(コメンテーター)
松居 竜五 (龍谷大学国際文化学部助教授)

●共通論題セッション4

「多文化間対話の技法について検討する」

(司会)

水野治太郎 (麗澤大学外国語学部教授)
(パネリスト)
正宗 鈴香 (麗澤大学外国語学部講師)
岡田千あき (大阪外国語大学外国語学部講師)

<午後3時30分～午後4時> コーヒーブレイク

<午後4時～午後6時>

●共通論題セッション5

「アジア・太平洋地区における

言語の多様性と今後の展望」

(司会)

堀江 薫 (東北大学大学院国際文化研究科教授)
(パネリスト)
角田 太作 (東京大学教授)
北野 浩章 (愛知教育大学助教授)

パルデシ・ブラシャント (神戸大学講師)

●共通論題セッション6

「国際交流の担い手としての若者」

(司会)

小川 忠 (国際交流基金課長)
(パネリスト)
川村 陶子 (成蹊大学助教授)
辻本 勇夫 (国際交流基金審議役)
小浜 道子 (仙台国際交流協会)

●共通論題セッション7

「住生活の文化－ブルーノ・タウトの再評価」

(司会)

澤田 誠二 (明治大学工学部教授)
(パネリスト・報告者)
田中 文男 (創造学園大学教授)
関本英太郎 (東北大学情報科学研究科教授)
伊藤 邦明 (東北大学名誉教授)
大沼 正寛 (東北文化学園大学講師)

●共通論題セッション8

「モダニティーの拡大とナショナリズム」

(司会)

吉住 磨子 (佐賀大学文化教育学部助教授)
(パネリスト・報告者)
田村 栄子 (佐賀大学文化教育学部教授)
木原 誠 (佐賀大学文化教育学部助教授)
山崎 功 (佐賀大学文化教育学部助教授)
吉岡 剛彦 (佐賀大学文化教育学部講師)

<午後6時30分>懇親会

第2日 (7月16日)

<午前9時～10時> 日本国際文化学会理事会

<午前10時～12時>

●自由論題セッションH

高本 康子 (東北大学国際文化研究科博士課程)
「ヘディン来日報道に見るチベット・イメージ」
金 敬黙 (中京大学教養部講師)
「国民国家における宗教と政治－韓国における
プロテスタント教会の政治参加の事例から」
金 龍範 (中部大学国際人間学研究科国際関係学専攻)
「中国延辺朝鮮族自治州における
韓国系教会の宣教活動にみる中韓民間交流」
徐 玉子 (京都大学人間・環境学研究所)
「越境する売春女性たち－韓国京畿道における米
兵相手のフィリピン人エンターテナーの生活世界－」

●自由論題セッションI

比嘉 理麻 (筑波大学人文社会科学研究所
国際政治経済学専攻)
「グローバル化のなかの沖縄の豚肉－統計資料に
みる豚肉と市場における豚肉の消費－」
村田 幸代 (龍谷大学国際文化研究科博士課程)

「開発教育の実験的実践」

劉 庭秀 (東北大学国際文化研究科助教授)
斉藤 優子 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「食品流通における

日本の容器包装リサイクルの課題」

郝 佳慧 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「中国内モンゴルにおけるカシミア業の

発展と砂漠化に係わる問題の現状と課題」

●自由論題セッションJ

(司会：葉 剛・東北大学)

早川 公 (筑波大学人文科学研究科

国際政治経済学専攻)

「『認識される経済』とその構築メカニズム

—地域通貨を取り巻く言語表象の分析を通じて—」

松村 玲 (東北大学国際文化研究科経済交流論)

「知識資本と内生的経済成長」

鄭 京花 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「企業における環境問題への取り組み

—鉛フリー対策を中心に—」

趙 承勲 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「韓国における防衛技術の技術移転について

—先行研究の限界を中心に—」

●自由論題セッションK

(司会：島途 健一・東北大学)

野呂田純一 (国際交流団体職員)

「現代日本社会の美術への志向性

—その歴史的源流を探る—」

久慈 達也 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「反近代の思想家にとっての『芸術』—A. K. クマ

ーラスワーミとM. K. ガンディーの事例から—」

高畑 祥子 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「ブルガリアとミッション・スクール

(19世紀末—20世紀初頭)」

宮武 優子 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「環境教育の実施による

環境意識の形成と宗教の影響」

●自由論題セッションL

(司会：佐藤 滋・東北大学)

桑田カツ子 (会津大学短期大学部非常勤講師)

「国際言語としての英語教育を目指して」

和田 恵理 (東北大学国際文化研究科博士課程)

小野 尚之 (東北大学国際文化研究科教授)

「コミュニケーション・スキルの文化による違い

—薬剤師から患者への説明場面をもとに—」

沈 瑩 (東北大学国際文化研究科博士課程)

Analysis of Discourse Markers among Native Speakers of English, Japanese and Chinese English Learners

森本 智 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「日本人英語学習者による英語の関係節習得：

語順類型論と文処理の観点から」

●自由論題セッションM

李 美賢 (東北大学国際文化研究科博士課程)

「日韓両言語における推量表現の比較—「そうだ

「ようだ」と「kes kath-ta」「moyang-ita」について—」

ドルジハンダ (東北大学国際文化研究科博士課程)

「モンゴル語の「補文」の統語的・意味的特徴
—日本語との対照を通じて—」

李 貞勲 (東北大学国際文化研究科博士課程)

堀江 薫 (東北大学高等教育開発推進センター教授)

「日本語の可能表現の文法的なカテゴリー

—韓国語との対照を通じて—」

フレルバタル (東北大学国際文化研究科博士課程)

「モンゴル昔話と日本昔話の比較研究」

●自由論題セッションN

(司会：若林 一平・文教大学)

若林 一平 (文教大学国際学部)

「樺太から満州へ—国際文化と植民の記憶を追って」

藤巻 光浩 (文教大学国際学部)

「近代博物館と公共性の関係：旭川市博物館から

考える『展示文化』のあり方について」

椎野 信雄 (文教大学国際学部)

「『日本語』へのエスノメソドロジ的アプローチ」

山脇千賀子 (文教大学国際学部)

「移民社会化する日本の教育課題」

<12時~午後1時>日本国際文化学会総会

<午後1時~3時30分>シンポジウム

「二十一世紀・グローバル時代の宗教

—民族・国家・非暴力」

(司会)

石幡 直樹 (東北大学国際文化研究科教授)

(コーディネーター)

山形 孝夫 (宮城学院女子大学名誉教授)

(パネリスト)

山折 哲雄 (前国際日本文化研究センター所長)

塩尻 和子 (筑波大学教授)

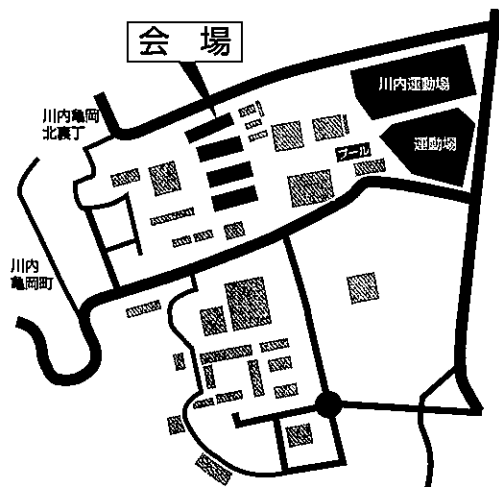
川村 邦光 (大阪大学教授)

山形 孝夫 (宮城学院女子大学名誉教授)

(コメンテーター)

黒田 卓 (東北大学国際文化研究科助教授)

新免 貢 (宮城学院女子大学教授)



会場はマルチメディア教育棟と講義棟の4棟です

研究会の報告

2006年4月15日（土）早稲田大学8号館501会議室にて第8回研究会が開かれました。

報告者は川村陶子氏（成蹊大学文学部）、牧田東一氏（桜美林大学国際学部）、青木（岡部）まき氏（アジア経済研究所）で、以下は川村陶子氏による要約です。

欧米における 「国際関係と文化」研究の動向

～国際会議「Culture and International
History III」に参加して～

川村 陶子（成蹊大学）

昨年末、筆者は、ドイツで開催された国際会議「文化と国際関係史」に、青木（岡部）まき氏（アジア経済研究所）牧田東一氏（桜美林大学）とともに参加した。当会議は、主に欧米地域で「国際文化」に関連した研究・実践を行う人びとの交流の場となっている。幸い、4月15日の日本国際文化学会研究会にて、その趣旨や内容について報告する機会をいただいた。以下、研究会での報告内容と出席者からの反応を要約する。

当会議は、フランクフルト大学のジェシカ・C. E. ギノ＝ヘヒト（Jessica C.E. Gienow-Hecht）教授が中心となり、米国の文化外交研究所（Institute for Cultural Diplomacy）の支援を得て、約3年に1度の間隔で開催する国際会議である（注1）。会議の全体目的は、文化と国際関係（史）に関する最新の研究報告と、このテーマに関心を持つ人びとの交流である。昨年の会合は第3回目にあたり、2005年12月19日から21日の3日間、フランクフルト大学で開催された（注2）。

会議は、外交史（文化外交・国際協力等）、カルチュラル・スタディーズ、芸術政策、国際関係理論、政治思想など、幅広い分野に及ぶ15のパネルから構成された。セッションや食事・休憩は全て大学所有のヴィラで行われ、参加者は原則として報告者に限るという合宿風の企画であった。3つのパネルが同時進行し、ときに報告者・司会者とフロアーがほぼ同人数という形式は、参加者の間に親密な雰囲気をつくり出し、中身の濃い議論が行われる結果となった。初日夜の懇親会では、ヨーロッパ諸国の饗宴外交と「政治的食文化」に関するユーモアたっぷりの報告があり、一同大いに盛り上がった。

報告者は総勢約50名で、半数は米国に拠点を置いており、欧州からはドイツ、フランス、スイス等からの参加が多かった。非欧米地域からの参加は、ブラジルからの1名、日本からの3名であった。研究者と実務者の別は設けられず、キュレーターや国際協力団体職員など、国際文化協力・交流の現場で働く人びともパネリストとなり、議論の幅を広げることに貢献していた。

川村・青木・牧田は、3日目の最終セッションで、戦後日本の国際文化交流をテーマとしたパネルを組んだ。パネルの内容は、2005年に日本で出版した共同研究の成果（注3）をもとにしたもので、国際文化交流（英訳はinternational cultural relations）という概念を用いた研究枠組み、アジア地域文化協力に対する日本の取り組み（欧州におけるドイツのケースとの比較）、国際文化交流と日本の「市民社会」形成について、3人がそれぞれ報告を行った。日本における、異なる文化（国・地域）との関係の持ち方や、「文化」「交流」という概念、戦後の国際交流・協力活動や市民社会のあり方などに、他の参加者から大きな関心が寄せられた。

会議に参加しての印象をまとめると、以下のようになる。

(1) 会議の中心を占めたのは、文化外交（cultural diplomacy）や欧米間の文化関係を扱った研究報告であった。東西対立終焉から15年が経過した現在、外交史の分野で、冷戦を新たな視点から見直そうとする傾向が強まっていることの表れと考えられる。

(2) 「国際文化」研究の拡がりを実感できたのは、国レベル以外の国際文化関係に関するパネルである。植民地の言語政策、国際結婚、ミュージアムの国際戦略、芸術家の交流など、多様なテーマがあった。これらのパネルでは、若手研究者に混じって、国際交流の実務者たちが新鮮な議論を提供していた。

(3) 基礎概念である「文化」について、明確で合意された定義は存在しなかった。このことの弊害が顕著に表れたのが「理論と思想」パネルで、4つの報告が皆異なるディシプリンに立脚し、報告者同士で議論が成立しないという現象が生じた。多様な文化概念が入り

乱れる中で、日本における「国際文化」の研究・実践の独自性も明らかになった（たとえば、「文化」を「平和」とつなげて考える思想的伝統）。

(4) 西側欧米諸国の出身者が圧倒的に多く、旧ソ連の文化外交に一方向的に低い評価が与えられるなど、偏った議論もみられた。しかし、戦間期の多国間協力に関する歴史研究などで、非欧米や途上国の立場を相対主義的に捉え直そうとする視点もあり、討論では非欧米圏からの発言に関心が集まった。日本については、研究状況はもとより、歴史や政治社会の現実が知られておらず、情報発信の必要性が痛感された。

(5) 国際文化関係や国際文化交流に関する研究は、日本ではあまり注目されないが、今回の会議に参加して、問題意識の共通する人たちが各国に存在することがわかった。今後、このような研究者・実践者の交流に積極的に参加すること、また日本でもこうした交流の機会を作ることが大切であると実感した。

研究会では、以上のような筆者たちの報告に対し、限られた時間内に多くのコメントを寄せていただいた。

翻訳と言語コミュニケーション、多文化共生など、当会議では扱われなかった重要なテーマが指摘されるとともに、文化の概念を深く検討する必要性が確認された。また、「文化」を超国家的「平和」とリンクさせる問題設定の重要性が認識され、若手出席者から今後の研究発信に向けた抱負も聞かれるなど、日本の国際文化研究の射程や、その発展の方向性が浮き彫りになった。このような刺激的な議論の機会を提供して下さった松井賢一会長、司会の寺田元一先生はじめ、出席者の皆さまに重ねて感謝を表したい。

(注1) 1999年12月に開催された第一回会合の成果は、以下の論文集として出版されている。

Jessica C.E. Gienow-Hecht and Frank Schumacher (eds.), *Culture and International History*, Berghahn 2002. Jessica C.E. Gienow-Hecht and Frank Schumacher (eds.), *Culture and International History*, Berghahn 2002.

(注2) 会議の概要は、以下のサイトでも公開されている(2006年5月現在)。

<http://www.culturaldiplomacy.org/pages/events/hpn/cih/index.htm>

(注3) 戦後日本国際文化交流研究会著、平野健一郎監修『戦後日本の国際文化交流』勁草書房、2005年。

information

日本国際文化学会では、毎年度学会誌『インターカルチュラル』を発行しております。現在の編集長は熊田泰章副会長(法政大学)です。バックナンバーをご入り用の方はアカデミア出版会までお問い合わせください。(TEL.075-771-7055 FAX.075-771-9595)



「インターカルチュラル1」
2003年7月30日発行



「インターカルチュラル2」
2004年5月20日発行



「インターカルチュラル3」
2005年4月30日発行



「インターカルチュラル4」
2006年4月25日発行